

Title	アダム・スミス「地代論」の一考察
Sub Title	
Author	島崎, 隆夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1948
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.41, No.3 (1948. 3) ,p.121(15)- 142(36)
JaLC DOI	10.14991/001.19480301-0015
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19480301-0015

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

族勢力が衰へたのを利用して主權を伸長し、中央集權的獨裁君主制のチュダー王朝(一四八五—一六〇三年)を確立したのであつた。佛蘭西のヴァロア、オルレアン王朝も略々同じ道程を辿つた。獨逸領邦でもメクレンブルクの如きは一八一八年に至るまで等族國家形態を維持したが、それに隣れるプロイセンでは王が武力において優勢であつたため早く廢絶されて、英・佛等に見る如き絶對王政が成立したのであつた。

アダム・スミス「地代論」の一考察

島崎 隆夫

アダム・スミスは社會形態を社會の現實的歴史的發展の推移に即應せしめて區分し、各々異なる社會に異なる法則を安當せしめる。

元來「生産の社會的形態の如何を問はず、労働者と生産機關とは常に生産上の因子たるを失はぬ。然し、それが相互に分離された状態についていへば、此等の物はたゞ可能的にのみ生産の因子たるに過ぎぬのであつて、苟くも生産が行はれるためには、兩者の結合を必要とするのである。この結合が行はれる特殊の様式に従つて、社會構造の種々異なる經濟的時期の上に區別が與へられる。」註一 スミスは生産手段と労働力との結合の未分離の状態と、生産が「土地の私有と資本の蓄積」下に行はれる状態とを區別し、第一の社會に行はるゝ「價值法則」は第二の社會下に於ては新しく一つの變移を受け、相異なる社會に於ては異なる法則が支配する事を論じた。前者は「資本の蓄積と土地の私有に先立つ初期未開の社會 (In that early and rude state of society which……)」註二 即「原始的状態 (In that original state of things, which……)」註三であつて、生産手段と労働力とは同一人の手中に存在し、所謂「單

純商品生産社會」又「前資本主義社會」に該當し、後者は文明社會 (Civilized society) 註四であつて、近代的生産の行はれてゐる社會、所謂「資本主義的商品生産社會」或は「資本主義社會」である。然しながら、スミスは兩社會に於ける價值法則の理論的關聯を充分明確に展開し得なかつた。

スミスの規定する第一の社會形態——勞働力と生産手段との未分離の社會——に於ては、「勞働の全生産物はその勞働者に屬した。彼は共に分つべき地主も主人も有たなかつた。」註五のであつた。商品を生産するために必要とした勞働量 (所謂「投下勞働量」) は生産物の交換關係を規律する唯一の事情であつて、「商品を購入し、支配し得る勞働量 (所謂「支配勞働量」) と量的に同一であつた。此の二つの相異なる内容を有する勞働量——投下勞働量と支配勞働量——が量的に相一致してゐると言ふ事實は「前資本主義社會」の價值法則に關する限り未だその背理を現はさず、矛盾なく妥當してゐる。「前資本主義社會」に於ては、商品の直接生産者は商品生産の唯一の主體であり、生産擔當者であり、商品を生産し、獲得し、全部或は一部を交換に供し得る者であつた。それ故スミスは「勞働の全生産物はその勞働者に屬する。」と論じ、勞働の生産物の價值はただ勞働の勞賃にのみ分解して行き、其處には、「利潤」「地代」等の經濟的諸現象の發生する餘地は未だ存在しなかつた。「利潤」「地代」等の新なる經濟的諸現象の發生して來る社會は此の「前資本主義社會」が崩壊し、「資本の蓄積と土地の私有」が現れ、其等が社會的生產を支配し得るに至る新なる社會形態下に於てあり、それらは「資本主義社會」に於ける經濟的諸現象である事が了解出来る。かゝる事實よりしてスミスが取扱ひ、論述せんとする「地代」は「資本主義社會」に於て現象する純粹の「地代」である事を示してゐる。

「地代現象」が發生するに至るのは、その社會に於て第一に資本の蓄積が特殊の人の手に蓄積せられ、その資本が社會的生產をその支配下に置き、社會的生產が資本に依り運營せらるゝに及んだ時である。而して、資本が地代發生の地盤と考へられる農業生産部門にまで多少共入り込み、農業生産を自身をも把握するに至つたことである。第二に「土地」のすべてが私有財産となるに至つた事である。これは嚴密な意味に於て、土地所有が土地所有として作用すること、唯單に法律上のみならず、經濟上も又土地所有が土地所有として生産に何等かの作用を及ぼす如き土地所有が存在することである。此等二つの基本的な條件下に於ける農業生産部門に於て地代現象の發生を見る。此等の諸點を詳細に考究し、地代成立の條件中基本的なるものを考察しやう。

第一に、資本制生産が當該經濟社會を支配してゐる状態、換言すれば、其の社會が資本主義社會であり、工業部門は勿論のこと、農業部門にまで資本制生産が支配的形態として發展し、資本制生産が主導的役割を演じつゝある社會。此が地代現象發生成立の第一の前提となる。此の事實は農業生産部門に於て資本制生産が完成し、總ての農業生産が資本制生産に完全に移行してゐることは必ずしも必要としないのであるが、然し乍ら、全く資本制生産が農業生産部門に、農業生産の資本主義化・近代化が排除してゐるところには勿論地代現象は「資本制地代」として發生し得ず、又成立し得ない。換言すれば、かゝる前提の存在はスミスをして地代を「資本制地代」として把握せしめるに至らしめたのである。斯の如く、資本制生産の存在を前提することは一つの歴史的前提とも云へるのであつて、十八世紀中葉に至るイギリス農業事情を反映せるものと思はれる。スミスにとつて資本制生産が現實の社會を支配してゐると云ふ事實は眼前の現實であつた。何等疑ふ餘地無き事實として、又永久不變の社會としてスミスに映じたのであつた。

スミスは彼の眼で資本の蓄積が行はれ、土地私有が存在し、それらの支配下に工業農業等の生産部門のみならず社會現象が一切活動せしめられてゐたイギリス資本主義社會を生々と把握したのであつた。封建的社會の崩壞の終期、舊

き封建的諸關係が未だ強き粘着性を固持しつゝ、新らしき近代社會への移行を既に初めつゝあつた社會を把握したのであつた。それ故スミスにとつては何故資本が蓄積されたか、或は何故土地が私有制度下に置かれるに至つたか等の諸問題は全く問題たり得ず、たゞ資本が一部に蓄積されており、土地が既に少數の人々の手中に握られてゐたと云ふ現實を把握し、それらを既定の事實として考へたのである。

資本制生産は本來資本と賃銀労働者の發生及存在をその成立及發展の前提條件とするものであり、「農業賃銀労働者」が資本の極として存在することは當然の前提であつて、同時に賃銀労働者が一つの生産部面から他の生産部面への自由なる移動、労働者相互間の自由競争も又前提とせられてゐる。

第二に、「土地私有」の存在はスミスに於て地代現象發生に關し決定的に重要な意義を有してゐる。前述せる如く、スミスにあつては土地所有が土地所有として經濟的作用を演じ、すべての土地は私有され、資本は土地所有をその放下の極格として見出すが如き形態は於て存在する土地所有として把握されてゐる。此點、リカード地代論に於ける土地所有の意義と異なる。リカードは土地所有そのものは地代成立のためには恰も存在せざるが如く前提し、經濟的作用として資本投下に一つの影響を與へるが如き土地所有の存在を無視し、土地への投資が何等の障礙も無く自由に行はるゝが如き見解を有してゐた。スミスとリカードとの土地所有の經濟的意義に對する評價の差異は一は彼等二人の置かれたイギリスの歴史的事情の差異に依る事であるが、リカードと異り、スミスは土地所有を資本の土地への投資に對して一大障礙へ與へしめる制度として把握し、彼は資本に對し一つの極格としての土地所有を想定してゐる。スミスは地代現象を考察する際に正常にも土地所有と地代とを關聯せしめたのであつて、スミスの地代理論より「土地所有」の經濟的意義を學ぶことは重要である。即ち「スミスに於ては地代を要求するものこそ土地所有であり、

土地所有者としての土地所有であると云ふことが非常に強調せられてゐる」註六ののである。

近代的資本主義社會とそれ以前の社會とを根本的に區別する點は生産の重要條件が土地所有から資本に移行した事實である。歴史的端緒にあつては舊い封建的農村經濟體制の解體を前提し、農村經濟體制よりの工業の分離、工業生産部面に於て早くも資本が發達し近代的資本主義的生産様式が支配的となり、新社會の總てを指導する中心的役割を演ずるに至つた。農業生産部面は歴史的にも工業生産におくられて資本制生産が發展し、農業生産の近代化に資本主義化は工業生産に比しヨリ「後進的」であつた。農業生産は工業生産に比し資本主義化に於て「後進的」であると把握され、換言すれば、農業生産部面に於ても既に資本制生産が支配し初めてはるが工業生産に比しその發達の度に於ておくれであるものとして農業生産が把握されてゐるのである。

以上の諸前提は、スミスのみならず多くのイギリスの地代論者が取つたものであり、スミスよりリカード、リカードよりマルクスと資本主義社會がより進展して行くに伴ひ、ヨリ純粹に此等諸前提が考究せられてゐる。

さて、「スミスにあつて地代現象は如何に把握せられてゐるであらうか」。以下の論究に於て示す如く、スミス地代理論の中には多くの一見相矛盾するが如き感を懷かしむる地代理論の展開を見るのであるが、これはスミスの現實觀察の極めて廣汎なると追究力の鋭さを示すものと思はれ、スミスの地代理論は彼以後の多くの論者により發展せしめられた諸理論に基礎と知識の源泉とを與へたのである。次に、スミスが彼の廣汎なる現實認識により複雑なる地代現象を如何に把握し、地代理論を展開したかを探りつゝ、彼の理論體系の中に、後に展開せられた所謂「差額地代」「絶對地代」の萌芽的存在を、特に後者のそれを考察しやう。

註一 「資本論」第二卷一五頁(改造社高島譯ニヨル)

アダム・スミス「地代論」の考察

註二、アダム・スミス「國富論」第一編一〇〇頁(岩波文庫版)

大内兵衛譯ニヨル

註三 「國富論」第一編一三〇頁

註四 「國富論」第七編三九頁

註五 「國富論」第一編一〇一頁及一三〇頁

註六 「剩餘價值學說史」第二卷一三七頁(改造社・マル・エン)

全集第十卷猪俣譯ニヨル

スミスは地代を「資本主義的地代」として、「土地の私有と資本の蓄積」下に於て發生する經濟的現象として把握した。「前資本主義社會」が崩壊し、「土地の私有と資本の蓄積」下に於て社會的生產が行はれるに至るや、「前資本主義社會」の「價值法則」は如何になるであろうか。以下極めて簡単にではあるが、スミスの價值に關する見解の一端と、自然價格の理論とを概観しやう。

「資本が一度び特殊の人々の手に蓄積されるや否や、彼等のあるものはその資本を用ひて、勤勉なる人々に原料と生活資料とを供給して仕事を爲さしめ、彼等の製作物の賣却によりて、または、その人々の勞働が原料の價值に添加するものによつて、利潤(Profit)を得ようとするのは自然であらう。」註一かゝる極めて簡單なる論述の中に近代資本制生産の諸規定——本質を見ることが出來やう。この生産様式に於ては、生産手段と勞働力の所有者とは分離され、一方には資本を手中に蓄積し、原料及生活資料を供給し得る者と、他方には勞働のみを實施する「勤勉なる人々」註二との分離、これが資本制生産様式の基礎であつて、資本の所有者は資本を投下し、一方には生産手段、他方には原料と生活資料とを供給して勤勉なる人々をして仕事をなさしめ、價值を生産せしめ、利潤を獲得せんとするのである。利潤獲得を目的として生産手段と勞働力を結合して生産が遂行せられる。かくして、「その完成したる製造品を、貨幣、勞働、または他の貨物と交換する場合には、この冒險に取て資本を投ずるこの事業の企業家にもその利潤

として、原料の價格及び職工の賃銀を支拂ふに足るもの以上に、何物かが與へられなければならない。註三該生産が他物を支配し、購買せんとする場合、生産のため投下された投下勞働量は他物を支配し得べき勞働量を規定する唯一の事情ではなく、資本の利潤としての追加量が加へられ、投下勞働量より多量の勞働量が支配せられねばならない。資本主義社會に於ては「投下勞働量」と「支配勞働量」とは量的に一致せず、常に資本に對する利潤分だけ投下勞働量に對し支配勞働量は多くあることを要する。それ故、商品の價值は投下勞働量により規定せられる事は出來ず、投下勞働量と利潤としての追加勞働量との利がその規定者となる。かくの如く、スミスは考へたのである。

投下勞働量と支配勞働量との量的不一致の現象は「土地の私有」が行はるゝに至り、更に甚しいものとして現はれる。ある國の土地がすべて私有財産となるや否や、地主もまたすべての他の人々と同じく、彼等がかつて得なかつた場所で收穫することを好み、その自然的な生産物に對してすら地代を要求する。註四 勞働者及農業經營者は土地財産の所有から分離してゐる。彼等は土地を耕作し、又自然物を收穫せんとする爲には土地の使用に對して許可を得なければならず、それは代償無しには與へられないである。彼等は自己の生産物の一部を代償として土地所有者に支拂ひ、農業生産を實施する。かくして、生産せられた商品は更に一個の「追加的價格」が與へられ、商品の價值は「投下勞働量」「利潤」としての追加量、及「地代」としての追加量の三者の合計の勞働量を支配せねばならないとスミスは言ふ。

以上の如く、「資本及土地」が生産に参加すに至つた資本主義社會に於ては、生産物を生産する爲に投せられた投下勞働量と生産物が支配する他勞働量に支配勞働量との間に量的不一致が起つて來たと云ふ事實は、「商品に對象化された勞働は」ヨリ多くの「商品に對象化されぬ勞働」を生ける勞働」を支配し得る事を意味する。斯様に量的不一致を來

たす部分にはもはや労働者自身の手中に入らず、それは資本を利用したと云ふ件で、或は土地を利用したと云ふ理由で、資本家には「利潤」として、土地所有者には「地代」として分與せらるゝに至つたのである。

以上の論述は、スミスが「価値」を取扱ふ場合、交換価値の尺度としての労働を、或は投下労働量の意味に解し、或は支配労働量の意味に解した二重の彼の價值論と關聯せしめられる。スミスにあつては、「商品に對象化された労働と生ける労働」又、「労働力の價值と労働の價值」との本質的相違を徹底的に把握するに至つて居らぬが、然し、兩者の量的不一致は認識せられてゐる。それ故、スミスは労働の生産物の交換価値はこの生産物を生産するために投下せられた労働の「労賃」に投下労働量のみから成るのではなく、「利潤」及「地代」からも成つてゐる。然し乍ら、この生産物を以て他の労働を支配し、購買する場合には唯その生産物の「労賃」に分解されゆくところの價值部分にのみ依るのである。もしも、「利潤」「地代」の一部が更に労働を支配し、購入せんとして用ひらるゝ場合は、即ち、それらが労賃に轉化せらるゝならば、ヨリ遙かに多くの労働量を支配し、購買することが可能なのである。かく考へる時は労働の生産物の交換価値は「労賃」として支拂はるゝ部分(支拂労働)と、労賃として支拂はれず資本家及地主の手中に獲得せらるゝ「利潤及地代」(不拂労働)とに分解せらるゝ事となるのである。「不拂労働に分解される價值部分を労賃の一部に轉化するならば、單に労賃のみから成る價值部分を労働の新購買にあてるよりも、ヨリ多くの労働量を購買し得る事になる。」註五

最初スミスは商品の價值を「労賃・利潤及地代」の三者に分解した。あらゆる社會においては、あらゆる物品の價格は、結局これ等三部分の内の一づれか一に、またはその全部に分解せられるものである。そして進歩せる社會においては、これ等の三つが大部分の物品の價格の内に、その構成部分として多かれ少かれ入り込むのである。」

註六 スミスは資本主義社會に於ては労働により生産せられた商品價值が労賃利潤及地代へと分解して行くと云ふ所謂「投下労働説」又「價值分解説」を論述した。此の場合「不變資本」の價值移轉の問題を全く考慮に入れなかつた事は理論上重大なる難點を残したものと云ひ得るのであるが、此等の理論を基礎として「利潤」「地代」現象を把握せんとしたのである。

スミスは「商品價值」と「自然價格」とを同一視する。スミスの見解によれば、商品價值は労賃利潤及地代の三者をその内容として構成されてゐる。今や、それは「自然價格」(Natural Price)である。土地が生産に参加し來る場合「地代」も「労賃及利潤」と全く同様に自然價格の構成要素として説明せられてゐる。「ある商品の價格が土地の地代と労働の賃銀と、その商品を産出し、精製し、市場に搬出するために用ひた資本の利潤とをこれ等の自然率に依つて支拂ふに充分なだけであつて、それ以上でもなく、それ以下でもないならば、この商品は「自然價格」で賣られるのである。」註七 自然價格は労賃、利潤、及地代が各々獨立に商品價值を決定することによつて成立せられるものであつて、自然價格そのものは、その構成部分たる労賃、利潤、及地代の各々の自然率が變動するに應じて變動する所である。今や、商品價值——自然價格はスミスにあつては労賃、利潤、及地代の三者を以て構成せられるものであつて、其等の合計である。此處では所謂「價值構成説」を論述し、それを基礎として「利潤」「地代」現象を解明せんとするのであるが、「利潤」「地代」は既に與へられたものとして前提され、それ以上深く追究せられてゐないのを知る。一方に於て「價值の勞賃等々への分解」と、他方に「勞賃等々に依つて價格の構成」との二個の見解が相入り交つてゐる。此等兩見解はスミス價值論に於ける前述の見解と關聯するものである。

註一 「國富論」第一編、一〇二頁

註二 右二同

アダム・スミス「地代論」の一考察

二二三 (三七)

註三 右ニ同シ

註四 「國富論」第一編、一〇四頁

註六 「國富論」第一編、一〇五頁

註五 「剩餘價值學說史」第二卷、一四二頁

註七 「國富論」第一編、一一四頁

三

スミスは自然價格概念を規定する場合に、地代は必ず土地生産物の自然價格の構成部分でなければならぬといふ。換言すれば、地代は勞賃及利潤と同様に價格構成の内容として、それは多くの商品において、第三の構成部分をなすものであり、地代は價格構成部分として、常に絶對にその位置を占めてゐる如きものとして考へられてゐる。

然るに、スミスは第一編第十一章「土地の地代について」を論ずる場合、上述とは異つた見解を述べてゐる。此處に於ては、地代は自然價格の構成部分として賃銀及び利潤とは異つた方法において入り込むで來ると云ふ。「地代は賃銀及び利潤とは異つた方法において、商品の價格に入り込む。」註一 此の事は、地代は自然價格の構成部分として常に絶對的にその内容を形成するものとして賃銀及び利潤と同様に入り込むで來ないことを意味し、換言すれば、領有された土地が生産に参加するに至るや否や、地代は必ずしも價格の内容中に入り込むで來ない。

「土地の生産物は、その普通の價格が、それを市場に持ち來すために使はねばならなかつた資本と、それに普通利潤を加へたものを補償するに足るものでなければ、普通、市場に提供せられることはない。もしも普通の價格がこれ以上である時は、その剩餘部分は自然土地の地代になるのである。」註二 地代は生産物價格中より資本家の前拂ひの勞賃と平均利潤とを支拂つた後に残る剩餘部分として規定せられてゐる。先に見た如く自然價格は「地代、勞賃、利潤」の全價值であり、商品が市場に長期間にわたつて持ち來たらしめられる最低の價格であつたが、今や、勞

賃と利潤とを補償し得る價格で商品は市場に提出せらるゝ事となる。スミスは自然價格(勞賃、利潤、及地代の合計)とは常態的に異なる「充分なる價格」(Sufficient Price)の概念にと移行する。「充分なる價格」とは「それを市場に持ち來すために使はねばならなかつた資本と、それに普通利潤を加へたものを補償するに足る」註三 價格であつて、此は商品が資本主義的生産下に於て生産せらるゝ爲に必要な價格、最低の價格、商品生産を續行し行く爲の不可缺條件たる價格であつて、これは純粹なる資本主義的生産——資本と勞働との二因子より成立し、土地が生産より抽象せられてゐる社會の生産——に於て表現せらるゝ生産價格である。リカードが彼の資本主義的生産の立場から考究した「生産價格」即、「資本家の前拂ひしたもの以外になほ平均利潤を支拂ふところの價格」であり、「種々の資本投下部面に於て資本家達の競争がつくり出すところの平均價格」である。而して資本家が商品生産を實施する場合、「充分なる價格」とは資本主義的生産にとつて充分な、資本の立場から見ても充分な價格の意味であり、それは當然「地代」を含まず、「地代」を排除さへする價格である。

通常價格 (Ordinary Price) 註四——需要如何により變動する價格、市場價格 (Market Price) に相應する——が少くともこの充分なる價格を補償し得るに足るのであれば、商品は市場に提供せられ、もはや自然價格は支拂るゝを要しない事となる。今地代發生に關聯して通常價格と充分なる價格との關係を表に示せば次の如くなる。

O.P. > S.P. 商品への市場 = 提供セラル、而して地代ヲ發生スル
O.P. < S.P. 商品への市場 = 提供セラル、而して地代ハ勿論、利潤ノ一部ヲ提供セラル
O.P. = S.P. 商品への市場 = 提供セラル、而して地代ハ發生セラル、賃銀ハ利潤ノミヲ支拂ヒ、地代ハ平均中ニ含マレシメラル

價格の構成部分として含まれてゐた地代は、通常價格が充分なる價格以上にある剩餘として把握され、常に地代を

生するか否かは通常価格が充分なる価格以上にあるか否かに依存し、それは「需要」如何による。此處に於ては、地代は一切の商品の価格の必然的なる構成部分ではないと云ふ事である。地代は一つの剰餘部分として把握せられてゐる。

以上の理論は大體に於て後に「差額地代」の發生に關する一つの出發點を指示してゐるものと考へられる。然し乍ら、剰餘部分の發生の根據を土地の生産力の差等に關聯せしめる事無く、需要供給關係に求めたために、正しい出發點はそれを正しい結論にまで發展せしめられる事なくして終つた。然し乍ら、スミスの他の所論、鑛山地代の發生を論ずる場合その發生の根據を鑛山の相對的豊度に關係せしめてゐる個所に於て、スミスは差額地代論的理論に多くの基礎を與へてゐるのであるが、此の方面に關しては他日之を論じたいと思ふ。

然し乍ら、スミスは地代に關する第二の把握に對して更に一個の例外を、地代がその生産物價格の必然的構成部分たる若干の土地生産物—食物—の存在を認めたのである。二三の土地生産物は常に需要があつて、通常価格が充分なる價格以上に生産價格以上に、剰餘部分II地代を支拂ふことの出来る状態に置かれてゐる。それ故、二三の土地生産物にとつては充分なる價格は「充分なる價格」ではなく、それ以上の剰餘を土地所有者への地代として生ずる程度にまで高くある事を必要とする。此の事は需要が如何なるものであつても常に何等かの地代が支拂はれるに充分なる價格でなければならぬ土地生産物であることを意味する。「一定の土地生産物にとつては市場の諸事情は常に通常價格をして充分なる價格以上にあらしめる。」註五「何等の反對作用も存在しない限り、土地所有をして、資本家にとつて充分なる價格以上に價格を引きあげる力を持たしめる。」註六 土地に資本が投ぜられた場合に常に生ずる地代の存在を暗示してゐるものゝ如くである。

「土地の生産物のある部分に對しては、常に充分の需要があつて、それを市場にもたらすのに必要な價格以上の價格がそれに對して提供せられるのである。それは常に地代を地主に提供する。」註七 スミスは先づ人口理論より始め、「人類はその生活手段に比例して増加する」註八が故に、食糧品は常に人類を増加せしめ、食糧品に對しては常に必ず多少の需要があり、食糧品を生産する土地にあつては「その位置の如何を問はず、たいていの土地は食物を市場にもたらすに必要な一切の労働を、苟も労働を維持する方法としては最も優遇的な程度に於て維持する以上に多くの食物を生産する。否、その剰餘は労働を使用したその資本をそれに利潤を附加して回収してなほ餘りあるものである。故に、地主に對する地代となつて何程かは必ず残る。」註九 此處では利潤も地代も共に生産物の中より労働者を養ふ部分を引去つた残りとして現はれるのである。即、「農業時代」にあつては、農業が供給する食糧品と消費せらるる食糧品との差額が發生する程農業生産力が發展せる事を意味し、此の差額より地代を考へたのであるが、「土地が「生産」すると考へることの中には多分にフィデオクラットの考へ方が存在してゐる。スミスの第十一章第一節に於ける説明からでは何故に食糧品生産が常に地代を支拂ふか、需要が多少あると云ふもそれは必ずしもかゝる食糧品にのみ限るものではなからうか、への解答としては不充分であろう。寧ろこゝに於ては主要植物—食糧品—は常に地代が存在する事が前提せられてゐるが如く、主要植物生産は利潤以外に地代を當然含むもの、當然含まれねばならぬものと考へてゐるに如くである。「人間の食料は常に且必然に地主に何程かの地代を生ずるところの唯一の土地の生産物であるやうに見える」註十と。

地代に關する第一と第三の見解に於て共に地代は「常に且必然に」その價格構成部分の中に入りこむものとして、地位や肥沃度とは一應無關係に、土地生産物だけ獨特な、生産が資本の蓄積と土地の私有下に於て行はれる時、

現れて来る現象である。此との關聯に於て、後に「絶對地代」として發展せしめられた地代理論への正しい出發點をその萌芽を示してあるものと見る事が出来はしないだろうか。かゝる地代のヨリ深き理解は、資本が如何なる生産部門に投下せらるゝかに關聯せしめてその根據が與へられるものと思ふ。

以上極めて簡略ではあるが、スミス地代論の概要を學ぶ事により、彼の地代理論の中に全く相異なる運動を行ふ二個の地代形態——絶對地代と差額地代——の發生への根據を價格構成部分として地代が如何に關聯したかを中心として解しやうとしたのである。

註一 「國富論」第一編、二八三頁

註二 「國富論」第一編、二八二頁

註三 「國富論」第一編、二八二頁

註四 「國富論」第一編、二八二頁

註五、註六 「剩餘價值學說史」第二卷、一五二頁

註七 「國富論」第一編、二八三頁

註八 「國富論」第一編、二八四頁

註九 「國富論」第一編、二八四—五頁

註十 「國富論」第一編、三一二頁

四

スミスの自然價格中にその構成部分としてある地代、二三の土地生産物にあつては常に且必然的に存在する地代、それらは後に「絶對地代」として發展せしめられた地代形態の萌芽を意味してゐると考へたのであつて、それは資本が農業生産に投下せられる時、資本が農業部門に投下せられ、農業部門を把握し、農業労働を運轉し、農業生産を實施する時生じて来る經濟的現象として、此の現象を解明しやうとする。

周知の如く、スミスは労働生産力改善の諸原因中第一は「分業」であると考へた。その分業の状態が一定であれば、換言すれば「その労働の適用上に於ける労働の熟練、技巧、及び判断の實狀が如何やうであれ、同じ状態がついて

かる限りは「國富の原因としての労働の生産力の大小を決定するものは「有用なる労働に使用される人の數」と「さういふ労働に使用されてゐない人の數」との割合であり、前者は、「有用にして生産的なる労働者の數は彼等を働かせるために使はれるところの資本的資財 (Capital Stock) の量に、それが使用されるところの特殊な方法に比例するものである。」註一第二篇に於て、スミスは右との關聯に於て、「資本的資財の性質、それが漸次に蓄積される方法、それが使用される方法如何によつてそれが働かせる労働の量が如何に違つて来るか」註二を論ずる。即ち、國富の要因、労働生産力の増進の要因としての「資本」が考察せられてゐる。

スミスは資本を分ちて「固定資本」と「流動資本」とに區別し、その各々の資本の生産的作用につき論ずる。一切の固定資本 (機械器具農場等) の作用は「労働の生産力を増進すること、言ひ換へれば、同數の労働者をしてヨリ多量の仕事を遂行することを得せしめることにある。」註三即ち、「労働をしてヨリ容易に生産せしめ」ることを生産的作用として明瞭に示されてゐる。又、流動資本は「價值」の生産の立場より見れば、眞に生産的作用をなし、労働の生産力を増進せしめる。流動資本は固定資本を補充し、絶えず之を支持し、固定資本と同様な作用を間接的に行ふと共に、原料及び生活資料とを労働者に提供し、一般に生産的労働を支持するところの作用をなす。故に、兩者を合して、資本の生産的作用として考へられることは「生産的労働を維持し、生産的労働者に勞賃を支給し、生産的労働の完成を促進する」註四ことである。實に「勤勞を動かすもの」或は「生産的労働を動かすもの」こそ資本の生産的作用と考へられるのであつて、資本が生産的労働を動かし、生産を實施し、價值を生産し、その結果として利潤が發生し來るものと考へられる。資本の生産的作用が生産的労働を動かす事であり、結果より見れば、それは利潤を獲得する事である。利潤獲得を目的とする資本はその生産的作用として生産的労働を動かすこと、然も、ヨリ多量の生産的労働

を動かすことに邁進する。スミスにとつては、ヨリ大なる生産的労働を動かすことが資本の作用として考へられてゐるが故に、この見地から「資本の用途」の問題が論じられたのである。

「すべての資本はたゞ生産的労働の維持のみに當てられるものではあるが、同量の資本が働かせることの出来る労働の量は、資本の用途が異なるに従つて著しく異なる、同様に、その使用がその國の土地及び労働の年々の生産物に附加するところの價値もまた著しく異なる。」註五 例へ同量の資本に於ても、資本の用途が異なるに従ひ、即ち投資せらるゝ産業の種類が異なるに従ひ、ヨリ多くの生産的労働を動かし、ヨリ多くの價値を生産する事が出来る。かゝる見地より最も多くの労働を動かすことの出来るのは(一)粗生生産物の獲得、であつて、次いで(二)製造業、(三)運輸、(四)分配、である。スミスは四種の異なる方法を擧げる。「その第一は、社會の使用及び消費に年々必要とせられる粗生生産物を獲得すること、第二に、直接の使用及び消費に供せんがために右の粗生生産物を製造し加工すること、第三は、その粗生生産物または製造品を豊富な場所より缺乏してゐる場所に運輸すること、最後に、この兩者の特定の部分をそれを必要とする人々の随時の需要に適するやうに小部分に區分すること。」註六 此等四種の資本用途が存在するが、同額の資本が、資本用途の異なるに従ひ、それが直接に活動させる生産的労働の量には甚しき相違があり、また、その所屬する社會の土地及び労働の年々の生産物の價値を増加する程度も亦大いに異なるのである。

「同額の資本のうちでは農業者の資本程に多量の生産的労働を活動せしめるものはない。労働する僕婢は勿論、彼の役者も亦生産的労働者である。また、農業においては、自然も人間と共に労働する。」

「農業に使用せられる労働者及び役者は、製造業の労働者の如く彼等自身が消費したものに等しい價値、換言すれば、彼等を雇傭する資本及びその所有者に對する利潤の價値を、再生産するのみならず、それよりは遙かにヨリ大き

い價値を再生産する。即ちこれ等のものは、農業者の資本及びそのすべての利潤以上に、なほ地主の地代を規則正しく再生産する。この地代は、その使用を地主が農業者に貸し與へてゐる自然そのものゝ右の如き力の生産物と見做さるべきものである。それは、さういふ力と考へられるものゝ大小、言葉を換へて云へば、土地の自然的または改良された豊度と考へられるものゝ大小によつて、大きくも小さくもなる。地代は人間の働きと認められる一さいのものを差引き、または補償した後に残る自然の働きである。

「要するに、農業に使用される資本は、製造業に使用される同量の資本に比較して、ヨリ多量の生産的労働を活動させるのみならず、また、それが使用する生産的労働の量に比して、その國の土地及び労働の年々の生産物に、その住民の實質的富及び収入に、遙かにヨリ多くの價値を附加するのである。即ち、資本のあらゆる用途の中で、これこそ社會にとつて最も有利なものである。」註七

農業に投下せられた資本の利益を主張する場合、右に長く引用したところよりも明らかなる如く、それが最も多くの生産的労働を動かすのみならず、更に農業に於ける労働には役者、自然も多大の協力が與へられる事を擧げてゐる。換言すれば、資本が農業資本として用ひらるゝ場合には、農業資本は工業資本よりヨリ多量の生産的労働を運轉し得るのみならず、農業に於ては自然も又人間に協力するため農業に於ける労働は工業に於けるそれよりもヨリ生産的であると云ふのである。後者の意味中には未だ多分にフィデオクラットの考へ方、「農業に於て自然も人間と共に労働する」との見解が存在してゐる事は周知の如くであるが、かゝるフィデオクラットの考へ方よりも、スミスが第一に、最も強調せんとしたことは「農業に投せられた資本が他の部門に投せられた資本よりも最も多くの生産的労働を動かす」註八と云ふ主張である。

同量の資本が投下部面を異にするに従ひ、或は多く、或は少く、生産的労働を動かすとは如何なる意味であるか。この事は各産業に於ける資本の構造——技術的ならびに社会的構成、所謂「資本の有機的構成」——が異つてゐることを示すものではなからうか。同一量の資本が可變資本と不變資本とに分れる比率は資本の有機的構成の如何による。資本の有機的構成の低位にある所謂「原始産業」に於ては生産手段等々に投下せられる資本部分（不變資本）に比して直接労働にあてられる資本部分（可變資本）が、有機的構成の高位にある産業と比較してヨリ多いことに外ならない。周知の如く、資本の有機的構成の高低は各産業の生産迂回の強度如何、不變資本と可變資本との組成如何により決定せられるのであり、それ故、各産業に於ける同一量の資本が動かす労働量の多少と云ふ事實は各産業に於ける資本の有機的構成上の差異を意味する。

スミスの右に述べた主張は、農業に於ても資本主義生産が行はれ、而も、工業部面に比し後進的であると云ふ現實的前提の存在する場合、農業への資本投下、生産性の低い、後進的な産業への資本投下は資本の有機的構成が低く、そのために、同一量の資本が他産業に比しヨリ多くの生産的労働を動かす事が出来ると云ふことに外ならない。

元來、「絶對地代とは」マルクスによれば「資本が工業でなく農業に投せられたと云ふことから生ずる地代であり、ヨリよき土地に投せられた資本が供する差額地代及至特殊利潤から全く獨立したものである。」註九

農業に於ける資本主義の發達の後進性を歴史的事實として認識する。もし農業と工業とが資本主義の發達に於て同一程度であり差異がないものと假定すれば、兩者の資本の有機的構成の差異は消滅し、絶對地代は發生せず、もし地代が發生するとすれば差額地代のみとなるであらう。リカードは農業と工業に於ける有機的構成に差異無きものと考へ、工業に比し農業労働生産性が歴史的にヨリ低位であることを認めず、彼の理論を構成したのであるが、この事は

歴史的事實を否定するものであらう。此點に於て、スミスは明白に資本の有機的構成の低位にある歴史的事實を認識してゐる。此の事はスミスが農業労働の特質を論じてゐる左記よりも知られる。農業労働は工業労働に比し技術的な觀點より見る時明白なる特質を有してゐるが故に、工業労働に比し技術的分業が行ひがたく、生産力の進歩が相對的に低いことを指摘してゐる。「農業に於ては製造業における如く、性質上そんなに細かく労働を區別することもまた各種の業務相互を完全に分離することも許るされない。」註十「農業に於ける労働のこれ等あらゆる部門を完全に充分に分離させることが出来ないといふことは、恐らくは、この技術における労働の生産力の改善が何故に製造業における改善に及ばないかの理由なのであらう。」註十

農業に於ける資本主義發達の後進性と云ふ歴史的事實——資本の有機的構成の差異の存在、たゞ一定の歴史的發展段階にのみ特有の、ヨリ高度の段階に於ては消失し得るところのもの、——を無視する事は大なる誤謬をおかす事となる。此の事實を正しく了解したスミスは、農業は工業に比し生産性がヨリ低位にあり、有機的構成も低く、それ故、農業は工業に比し「ヨリ生産的であり、ヨリ多くの生産的労働を動かす」事を論じ、これとの關聯に於て地代の發生の根據に對し一つの提言を爲してゐるのである。

農業資本の有機的構成を $60C+40V$ と假定する。註十一此の構成にあつては、他の産業に投下された資本の總量に於けるよりも、ヨリ多く勞賃を生ける労働に資本が支出されてゐる。此の事は此の部門に於ける労働の生産性の發達が相對的に低いことを示し、この假定はスミスが考へた農業部面への資本投下の事實と相照應する。即、「ヨリ多くの生産的労働を動かす」。かゝる場合、剩餘價值率を 50% とすれば生産物價值は 120 となるであらう。平均的な有機的構成を有する資本——競争により均等化せられた資本——を $80C+20V$ 、平均利潤率を 10% と假定

すれば生産価格は P_1 となるであろう。かゝる場合、生産物価値と生産価格との差額は地代を形成する。かゝる差額は資本 (P_2) が投下せられる耕地、炭坑等の自然的要素たる自然的豊饒性や地位の種々異なるところの労働の生産性の差異に少しも左右せられることが無い。かゝる差異は生産物の価値が P_1 、生産価格が P_2 、その差額が P_3 である事を少しも妨げない。然し乍ら、工業部に於ては、諸資本間の競争は資本家が P_2 を以て製造する商品の価値を P_2 ならしめ、相互に利潤を平均化せしめ、生産価格を成立せしめる。農業に於ては事情が異なる。「もし土地所有の抵抗が無いならば」農業に投下された資本も工業資本と同様に利潤の平均化に参加し、生産物価値 P_1 は生産価格 P_2 に押し下げられ、そこには剰餘地代は成立し得ないであろう。然し、農業に於てはかゝる假定——もし土地所有の抵抗が無いならば——を考へる事は出来ない。スミスは「土地私有」の存在を、而も経済的に土地所有として作用するところの「土地所有」を明白に認識してゐる。かゝる土地所有は資本が一度農業生産部に投下された時一つの「抵抗」、一つの「障碍」を與へる。それ故資本の「競争」すら生産価値 P_1 を生産価格 P_2 にまで押し下げることが出来得ず、こゝに所謂「絶対地代」が成立するのである。「絶対地代の存在は土地所有を前提するのみならず、實に前提された土地所有であり、言ひ換へれば、資本主義的生産によつて制約せられ變化せしめられた土地所有であるから。」註十二 かくて、絶対地代の成立は農業に資本が投下せられた時土地所有の存在により資本主義的均等化に對して一つの抵抗を與へ、生産物の価値を生産価格に押し下げ得ないところに成立するのである。それ故に生産物価値—価格の内には常に必然に地代を内含する事となるのである。

スミスが自然價格中における構成部分として、又二三の土地生産物にあつては常に且必然的に存在する部分、それが地代であると云ふ時、それは右に考察せる「絶対地代」の存在を意味してゐるものに外ならない。

註一 「國富論」序論及本書ノ構成一八頁
 註二 「國富論」右ニ同ジ
 註三 「國富論」第二編、二六頁
 註四 「國富論」第二編、一九頁等
 註五 「國富論」第二編、一五四頁
 註六 「國富論」第二編、一五四頁
 註七 「國富論」第二編、一五九頁—一六一頁

註八 中山伊知郎著スミス國富論、一四八頁參照
 註九 「剩餘價值學說史」第二卷、二〇頁
 註十 「國富論」第一編、二六頁
 註十一 以下ノ説明ニ於テ剩餘價值學說史第二卷ニ於テ展開セラレタルマルクスノ所論ヨリ表ヲ利用スル
 註十二 「剩餘價值學說史」第二卷、七八頁

五

スミスは第一篇第十一章冒頭に於て、地代を正當に規定してゐる。即、「地代は土地使用に對して支拂はれるところの價格と考へられるもの」註一である。「土地の生産物」中より「借地人が種を買ひ、労働に支拂ひ、家畜其他農業用具を購入保持するに要する資本を償ふに足るものと、それに附近における農業資本の利潤を加へたもの」を差引き、地主は「それ以上は少しも餘計な分前が借地人の手許に残らないやうにとめる」のである。この「分前こそ土地の自然的地代 (Natural Rent) と考へていゝものであつて、土地がたいいそれ位に貸されることが自然だと思はれるところの地代である。」註二 換言すれば、地代は生産物価値より生産価格を差引いた殘餘として、而もそれは土地使用に對して支拂はれるところのものを意味し、スミスの自然的地代はほぼ絶対地代に相當するものなることを知る。スミスが地代を土地に投下せられた資本の「利子」と混同しない事を注意する際「基本的地代」とそれへの附加物としての「利子」とを區別してゐる。即、「地主は少しも改良をほどこしたくない土地に對しても地代を要求するのであつて、改良費に對する想定の利子または利潤はたいいこの基本的地代に對する附加物に過ぎないので

ある。」註三又「地主は時として人工的改良の全然不可能な土地についても地代を要求する。」註四「スミスの云ふ」基
 本的地代」はほど「絶対地代」に相當するものである。かくの如く地代を要求するものは實に「土地私有」であつ
 て、「土地所有」の單純なる發現、その單純なる抵抗の結果として地代は云はゞ「獨占價格」註五である。土地所
 有の干渉が存在するために生産物價值は生産價格にまで押し下げられず、價值通りで賣られるのであつて、農産物の
 價格は土地所有の獨占によつて強制されて成立する一種の獨占價格であつて、此點でそれは工業生産物から區別せら
 れる。

以上極めて粗雑ではあるが、スミス地代論の構造を學びつゝ、彼の巨大な地代理論の中に後世に於て發展せしめら
 れた諸理論の萌芽が深く含まれてゐる事を知つた。一見相矛盾する如く思はれる彼の理論は實は相異つた運動法則を
 なす異つた地代形態が相入り交つて居たのである。

註一 「國富論」第一編、二八三頁
 註二 右ニ同シ
 註三 「國富論」第一編、二八一頁

註四 「國富論」第一編、二八一頁
 註五 「國富論」第一編、二八二頁

(三一・七・一五稿)

日本眞珠志 (下)

羽原 又吉

目次

一、序 説
 二、眞珠を生ずる貝
 三、文献上の眞珠

四、古代眞珠と海人(以上前號掲載)
 五、眞珠の工藝と藥用(以下本號掲載)
 六、眞珠工藝の推移
 七、マルコ・ポーロ旅行記の日本眞珠

八、舊幕時代の眞珠及び眞珠業
 九、舊幕期の眞珠取引
 十、維新後の眞珠業
 十一、眞珠養殖業

五、眞珠の工藝と藥用

眞珠の工藝品として最も有名なるものに奈良三月堂の
 不空絹索觀音菩薩がある。(前引)これは天平五年聖武
 天皇が良辨僧正に勅して作らしめたものであつて、白毫
 に用いた眞珠は「直徑二分五厘計、重量一分計の偏平圓形
 のアハビ眞珠」であり、また、寶冠の中央にある一對の
 眞珠は「其内一個は紛失せるも他の残れるものを見るに
 歪形茄子形にして長さ四分計重量二分計、その一端に孔
 を穿ちて銀線を貫かれたり、これ亦アハビ眞珠なり」な
 ほ寶冠は歪形の謂はゆるミ、ダマの重量一厘乃至三厘の
 ものが銀線に貫かれて數珠つなぎにされたものを以て

日本眞珠志 (下)

「縦横に飾られたり其數幾何なるを知らず、内には銀線
 の切斷して脱落せるものも尠からず、而してこの眞珠は
 確にシンジュガヒ眞珠なることを知る」とある。このほ
 か東大寺の寶物として同じく天平時代のものと思はれる
 眞珠と紫水晶とがある。これについて久米氏によると、
 「明治四十年九月四日奈良東大寺の大佛殿修理の際(中
 略)石壇の土中から發見せられ、二個の蓋付水晶小合子
 に納められ、合子の一つは外徑一寸計り、内に眞珠七顆、
 紫水晶三顆を、又他には外徑九分弱で内に眞珠六顆が納
 めてある。(中略)此眞珠並に紫水晶は何れも無孔で眞珠
 は銀白色に稍々黄色を帯びてゐる。之等は太佛殿建立に

三七 (一四)